



シリーズ

沖縄の海の生きもの

かりゆしの海～クジラの繁殖作戦

国営沖縄記念公園水族館長 内田詮三

以前の本誌でご紹介したようにイルカもクジラ類の仲間、小型のハクジラ類が「イルカ」という呼ばれ方をしているのだ。魚類のサメと同様、海の哺乳類、クジラ、イルカの交尾、出産など繁殖行動の海での観察例は殆どないと云ってよい位である。わずかに、極く最近、セミクジラの交尾の水中写真が撮影されたり、コククジラの赤ちゃんの頭から先の分娩例が撮影された程度である。イルカ類を水族館が飼育するようになりその交尾行動や分娩の状況が始めて実見され、彼らの繁殖の一端を垣間見ることができるようになった。哺乳類の繁殖は自然ではオスとメスがあってのことだ、先ずはイルカ共の雌雄判別法から始めよう。基本的に肛門と生殖溝の位置関係を目で見るか、手で触れて確かめるしかない。生殖溝はペニスや膣が鎮座している細長い溝である。写真のようにメスは右側に見える肛門と生殖溝が殆どくっついており、しかも生殖溝の外側に乳首を納めている乳溝が左右一対である。

イルカのメス、肛門と生殖溝がくっついている。生殖溝の外側に乳溝が見える。



一方、オスは肛門とペニスが入っている生殖溝が離れており、乳溝もない。睾丸も腹腔内に位置しており、ペニスも何時もペニス牽引筋に引っ張られて体内にあり、水中を泳ぐのに抵抗が多い邪魔物を排除しているのだ。何事にも例外はあるもので、ヒートでお馴染みのコビレゴンドウやオキゴンドウなどでは生殖溝の様子が少し違うのが厄介だ。つまり肛門と生殖溝が一本の長い溝になっていて泌尿生殖溝とも呼ばれてる。一見しただけでは肛門と生殖器の開口部の位置がわからない。乳溝の存在をしっかり確認するか、溝を開いて見たり、手で触れて肛門と生殖器開口部の位置を確かめるしかない。交尾に際してはペニス牽引筋は伸び、勃起したペニスが溝から飛び出してメスの生殖器に挿入される。妊娠期間は種類によって様々である。水族館の常連、バンドウイルカは約12ヶ月、シャチは大変長く16～17ヶ月、最大のクジラ、シロナガスクジラが8～12ヶ月である。クジラ類は一産一仔であり、胎内で大きく育った胎仔を一頭産む。



イルカのオス、肛門と生殖溝がはなれている。

出産時の体長はヒゲクジラでは母親の体長の30%、ハクジラ類では45%になる。従ってシロナガスクジラでは約7m、体重3トンもある巨大な赤ん坊クジラを産む。バンドウイルカの新生仔は1～1.3m位である。イルカの新生仔は尾から先に生まれるのが普通である。この点、ヒトとは反対だ。こうした事実も水族館の水槽内の分娩観察によって始めて判明したのである。しかし、これにも例外があり、シャチやシロイルカでは頭先の出産例もあるらしい。さて、水中に出産された新生仔は一目散に水面目がけて上昇する。母の胎内ではヘその緒で結ばれて生きていたが、外界へでたからには鼻で呼吸をしなければならないからだ。潜水艦発射のミサイルの如く、水面上に飛び出して呼吸をする。これがいわば、ヒトの赤ちゃんの「オガマー」のようなものだ。新生仔が死産で沈んだり、生きていても上昇できない時には母イルカが仔を鼻先で押して、水面上に持ち上げ、呼吸をさせようとする努力を続ける。哺乳類だから母親の乳を飲む。

イルカのお産、仔は尾から先に生まれる。



乳溝から突出する乳首を仔イルカは舌で巻き脂肪分を大量に含有する高濃度のミルクを頻繁に飲む、勿論、水中での授乳である。海水は飲まずに母乳だけを飲めるのだからうまくきてるものだ。育児は一年位続くが、生後数ヶ月で母乳以外の餌にも興味を示し、少しづつ食べるようになる。大きな仔を少なく生んで、大事に育てるのがクジラ・イルカの繁殖戦略である。魚類のように多数の卵を生み、多数が孵化し、大部分が捕食者に食べられるのとは対象的だ。イルカの赤ん坊を捕食するのは大型のサメ位のものだ。しかし、群れを作るイルカでは、仔はしっかりと守られているようだ。とは云え、クジラ類のお産や育児が常に順調というわけではない。この数年だけでもマッコウクジラ、サトウクジラ、ミンククジラの新生仔の死体が沖縄の島々に漂着している。水族館の「オキちゃん」のお産も失敗を重ねてきたが、今年4月生まれの新生仔は何とかなりそうである。

子宮内のイルカの胎仔、ヘその緒で母イルカから栄養を受ける。

